



図書館だより 12月号

令和7年12月10日発行 川島中学校・高等学校図書館

クラス読書会感想文の紹介

11月20日に高校で実施したクラス読書会の感想文を紹介します。読書会で使用したテキストは全体の一部分なので、1冊全部読んでみたい人は図書館へ来てください。感想文は抜粋しています。未掲載の感想文は次回紹介予定です。

☆ ムーンライト・シャドウ 吉本ばなな／著（「キッチン」所収 福武書店）

事故で恋人を同時に失ったさつきと柊。不思議な女性うらの導きで、亡くなった恋人と再会し、これからの未来へと歩み出す、喪失と再生の物語。

等という恋人を亡くした主人公と、兄と恋人を同時に亡くした柊が、お互いの悲しみを分かち合い、親しくなっていくのがよかった。うららが見せてくれた、かげろうの等を見た日に、柊も、亡くなった恋人が家に来てセーラー服を取っていったのは不思議だったが、もう、セーラー服なんか着なくても元気になれと柊を励ましているようにみえた。かげろうの等が現れるときに、恋人からもらった鈴が鳴ったのがせつなかった。

心に響いた（残った）一文 運命はその時一段もはずせないハシゴだった。どの場面をはすしても登り切ることはできない。 61HR 女子

☆ 魔法のプラハ 俵万智／著（「ある日、カルカッタ」所収 新潮社）

「ベルリン発プラハ」という小説のファンになった人たちが、小説の舞台となったプラハを訪れる。美しい景色を見るために来たが、この国の人たちの誇り高さを知ることとなった。

一つの作品を読み、その作品の舞台となった土地へ行ってみたいと考えたことがないわけではないが、一つ一つのシーンを振り返りながら、作品の人物がその時感じたことを自分自身も感じてみようなんて、今まで思いつきもしなかった。作者の表現力、感受性のすごさに圧倒されたような気持ちになった。

心に響いた（残った）一文 生よりも死に近き子が描きたる虹の向こうに昇る太陽 64HR 女子

冬季休業中 図書館開館日

12月24日～26日（午前）、1月6日

12月15日以降に借りた本の返却日は、1月8日です。
一人何冊でも借りられます！

☆ チヨ子 宮部みゆき／著（光文社）

アルバイトでピンクのウサギの着ぐるみをかぶり、のぞき穴から外を見ると、人間がいろいろなぬいぐるみやおもちゃになっている。自分の姿は、子どもの頃に大好きだった白いウサギのぬいぐるみ、「チヨ子」だった。しかし、一人だけ普通の中学生の姿に見える少年がいた…。

著者が伝えたかったことは、「人それぞれ誰でも、大切な物や大切な事などの思い出があり、それによって、色々な感情を育むことができ、今を生きていられる」ということだと考えた。決してそのことを忘れていたとしても、心に残ることがあったから人に優しくできたり、思いやりの心を持てるのだと思う。

心に響いた（残った）一文 何かを大切にしたい思い出。何かを大好きになった思い出。人は、それに守られて生きるのだ。 43HR 女子

☆ 走れメロス 太宰治／著（角川書店）

友の信頼にこたえるか、自分の命が大切か…。主人公メロスの心の葛藤を描く。

人を信じるということの大切さを実感した。メロスとセリヌンティウスはお互いを尊重していたからこそ、信じることができたんだと思った。人を信じる事は簡単にできる事ではないが、互いの人柄を尊重できる関係になることで、初めて「信じる」という言葉に変わるんだと思う。人と人との信実を学ぶことができた。

心に響いた（残った）一文 信実とは、けっして空虚な妄想ではなかった。 53HR 女子

☆ 少年 北杜夫／著（中央公論社）

東京の親元を離れて旧制高校に入学し、孤独を求め一人山に登る少年。信州の雄大な自然に抱かれながら、少年から青年へと成長する過程での17歳の葛藤を描く。北杜夫23歳の時の作品。

「少年」という小説で、なぜ心に響いた一文がこの文章なのかというと、全体を通して比喩や擬人法がすごいと感じたからだ。生まれたての蚊という言葉が、特に印象に残ったので、この文を選んだ。自然に対して、素晴らしいや美しいということを表現する方法にも、様々な表し方があるのだなと学ぶことができた。普段、このような小説を読まないの、この機会に本にふれることができてよかった。

心に響いた（残った）一文 人間について、これから生れたての蚊よりもウブに、新しく学ばねばならぬぼくなのではないか。 41HR 女子

私は、少年のように深く物事を考え、壮大な自然や人間とは何なのかなど、疑問に思ったことがなかった。真剣に考える少年は、度々山に出かけ、そこで感じる感覚が毎回変わっていくところに、少年の成長を感じた。経験や関わる人の影響もあるかもしれないが、私は、自然と人間、そして愛を知ろうとする強い意志が、少年の意識や概念を変えたのではないかなと思う。

心に響いた（残った）一文 素直にならなければならない。自然について、人間について、これから生れたての蚊よりもウブに、新しく学ばねばならぬぼくなのではないか。 41HR 女子

